



フローインジェクション研究懇談会の活性化を目指して

JAFIA 委員長 酒井忠雄
(愛知工業大学)

15th International Conference on Flow Injection Analysis(ICFIA08)が会員の皆様の精力的なご協力で成功裡に終わることができました。1991年にFlow Analysis Vが熊本で開催されて以来のフローインジェクション分析研究懇談会(JAFIA)にとって最大のイベントでありました。経験豊富な実行委員がそれぞれの分担責任を果たしていただき、日ごろのチームワークの良さも相乗的に作用し参加者はICFIA08を心から楽しんだと聞いている。またJAFIAの国際活動が改めて高く評価され、長年培ってきた素地が活かされたことに対して感謝するとともに、我々の活動を支えて頂いた先人に深謝したい。これまで「JAFIAの国際化」は大きな目標であったが、JFIAの国際評価、Talanta, Special Issue ICFIA08のGuest Editors, Peer Reviewにも多くの日本人研究者が選ばれ、国際誌の論文審査に従事する機会を得たことは誠に好ましいことである。また”Advances in Flow Injection Analysis and Related Technique, Chapter 7; On-line Sample Pretreatment: Extraction and Preconcentration” ed by S. Kolev and I. McKelvie, ElsevierにはJAFIAメンバー二人が執筆している。また2009年4月23日に「役にたつフローインジェクション分析」が「みみずく舎」より発刊されたが、これはフローインジェクション分析研究懇談会編集である。今までに発刊されたFIA関連の専門書に比べ、実用分析に重点が置かれている。このように最近の活動を評価すれば国際性・学際性には合格点が出せるであろう。しかしJAFIAの更なる活性化を図る必要がある。今まで検出機能をもつFIA, FIA装置のミニチュア化, 自動化などの研究が行われてきたが、機器分析としての評価はまだ高くない。JFIA, Vol.24, No.2に伊永隆史先生が述べられているが、現場の要求に応える実用・汎用的・タフなFIAとしては不十分である。検出器としてのFIAに加え「前処理機能としてのFIA・全自動FIA」の開発は近々の挑戦であろう。我々研究者が「学術性」に重きを置いたことで実用的FIAの展開が遅れたが、昨今は実用性の高いFIAが求められており、それに応えることがFIAの活性化に繋がると考える。幸い日本環境測定分析協会がJIS原案作成団体となり「流れ分析法による水質試験方法」の具体的項目が検討され、日本規格協会へ提出する作業が進められている。長年の懸案事項であるFIAのJIS化はFIAの市場性も含め、新たな展開に繋がると信じる。また5月15日に開催されたJAFIA委員会で今任稔彦氏が副委員長に就任され、また数名の新委員の就任があり、若返りも図られた。1st generation, 2nd generationと世代交代を進め、3rd generationに引き継ぐ準備体制は整いつつある。2010年には共催のICFIA16がタイで、またPasifichem2010(Hawaii)はJAFIAがco-organizerとなり「流れ分析」のsessionが予定されており、若いinvited speakersを推薦する予定である。幸いにも次世代の研究者が多くの学術経験を踏んでおり、JAFIAの将来展望は明るいと感じている。会員の益々のcontributionsが活性化に繋がると期待している。